

勝平神社地口絵灯ろう祭り

調査報告書

令和8年3月
秋 田 市

目 次

1	調査の目的	1
2	調査対象の概要	1
3	調査の視点	1
4	勝平神社について	1
5	地口行灯について	4
6	秋田市域における地口行灯	5
7	勝平神社の地口絵灯ろう祭りの歴史	7
8	勝平神社の例祭と地口絵灯ろう祭り	8
9	その他聴き取り事項	11
10	まとめ	12
	図版、写真、地口一覧	14
	當福寺地口絵灯ろう一覧、写真	23

勝平神社地口絵灯ろう祭り調査報告書

1 調査の目的

祭礼等において、地口（洒落・言葉遊び）や絵を描いた灯ろう（地口行灯）を飾ることは、江戸中期頃からはじめられたと言われる。本市においても文献資料や伝承により多くの神社等で行われていたとされるが、現在では、勝平神社の地口絵灯ろう祭りのみとなっている。同祭りは、一時、途絶えたことがあり、また、地口絵制作者が一人という状況が続き、継続が危ぶまれていたが、近年、後継者の育成なども進み、地域に愛される文化遺産としての保存継承への期待・関心が高まっている。

このような状況を踏まえ、秋田市内において唯一残る地口行灯の祭りとしてその歴史と現状を記録するとともに、祭礼を通じた藩政期から今日に至る住民のハレの日の民俗文化を研究するための資料を得ることを目的に勝平神社地口絵灯ろう祭りの調査を行う。

なお、「勝平神社地口絵灯ろう祭り」は、「地口絵灯ろう祭り」、他の地口絵灯ろうの祭りは「地口行灯」と表記する。

2 調査対象の概要

- (1) 名 称 勝平神社地口絵灯ろう祭り
- (2) 所 在 秋田市保戸野鉄砲町地内
- (3) 保持団体 宗教法人勝平神社
- (4) 開催時期 5月12日宵宮祭から5月13日例大祭まで(5月14日朝回収)
- (5) 設置箇所 神社境内ほか、近隣8町内会の各家々(氏子)

3 調査の視点

- ①祭りが行われてきた地域的背景の把握
- ②祭りの歴史・変遷の把握
- ③祭りの現在の実施状況および保持団体の状況の記録
- ④過去に行われていた市内の地口行灯の状況
- ⑤①～④を踏まえた本市民俗研究における地口絵灯ろう祭りの資料的価値

4 勝平神社について

- (1) 所在地の歴史的背景

勝平神社が所在する保戸野地区は久保田（秋田）城の西に位置する。

久保田城下町は、城の西側を南北に直線的に流れるよう掘り替えた旭川を武士町と町人町の境界とする町割であり、旭川の東側が内町・武士町、西側が外町・町人町となっているが、保戸野は、足軽町を中心とした旭川の西側にある

武士町という特殊性を持っている。

保戸野鉄砲町は、保戸野の南西端、外町を南北に走り通町で西に直角にまがる羽州街道の沿線に位置し、羽州街道上の防御として土塁と堀を組み合わせた六道の辻の西側にある足軽町であった。羽州街道の北側の通りには、東から聲体寺、来迎寺、蓮住寺の3寺院が並び、現在の勝平神社はその西側に位置する。

(2) 祭神

勝平神社は、武甕槌たけみかづちのかみ神と火産靈神ほむすびのかみの2柱を祭神とする。

武甕槌神は、茨城県鹿島市の鹿島神宮の主神として祀られていることから、鹿島の神とも呼ばれる。雷神・剣の神といわれ、鯰絵では日本に地震を引き起こす大鯰を押さえる神として描かれている。また、大國主命おおくにぬしのみことの国譲りの談判において大國主命の子、建御名方神たけみなかたのかみを力比べで屈服させるなど、武の神の性格を有している。

火産靈神は、伊弉諾いざなぎ・伊弉冉いざなみ両神から生まれ伊弉冉神の死の原因となったことから伊弉諾神に命を奪われる神話を持つ火の神である。

秋田市内には武甕槌神と、火産靈神を祭神とする神社は数多くあるが、勝平神社と同様に武甕槌神と火産靈神をともに祭神とする神社は、ほかに新城神社(下新城) 1社のみである。

(3) 沿革

創建は、大同2年(807)に坂上田村麻呂の遠征の際、陣中守護のため勝平山えみしに勧請されたと伝えられている。桓武天皇の時代、東北に遠征し蝦夷と戦った坂上田村麻呂の伝説は東北一円に見られ、田村麻呂伝説において、「田村麻呂が大同年間(806~810)に創建した」という伝承を持つ神社仏閣は数多く認められる。

東北地方で「大同年間」「坂上田村麻呂」創建の伝承を持つ社寺は、100を超えると推定される。当時、中納言の要職にあった田村麻呂がそれだけの社寺の創建に現地で関わることは現実的ではないが、延暦年間(782~806)の陸奥での長年にわたった戦の後の陸奥・出羽の社会の変容を反映したものである可能性があり、勝平神社の創建伝承もその意味で興味深いものである。

大同年間の創建の約250年後、康平年間(1058~1065)の頃、源頼義が鞍馬寺毘沙門として仰ぎ、勝平明神の名で勝平山西砂山に再建したとされる。

康平年間、源頼義が安倍氏・清原氏と戦った現在の岩手県を主戦場とする前九年合戦の後半・終戦後と、現在の秋田県を主戦場とする後三年合戦の開戦前にあたる。

江戸時代に入り、寛文2年(1662)に川尻毘沙門町へ、延宝6年(1678)に現在の八橋運動広場内へと2度遷座している。

川尻は、雄物川・旭川・太平川の合流点に囲まれた微高地であり、早くから河川舟運の要衝であったと考えられる。文禄元年（1592）の「秋田実季分限帳」には1,732石余とあり、石高の高い大村であったことがわかる。

川尻から延宝6年（1678）に遷座した八橋の地は、現在の八橋運動公園球技場の南西側にあたる。この場所は、八橋から寺内に東西に走る羽州街道から南側に曲がり川尻方面に向かう道沿いであり、かつては日吉八幡神社から御堂が並んでいた場所である。

寛政11年（1799）の「久保田城下絵図」（秋田県立図館所蔵）では、日吉八幡神社から南に「ホサツ堂・天神・太子・エヒス・伊勢・松尾・毘沙門」が並んでいる。また、文政11年（1828）頃の「羽州久保田大絵図」（秋田県立図書館所蔵）では、日吉八幡神社から南に「寿量院・太子・天神・イビス・伊勢神明・毘沙門天」が並んでいる。さらに、江戸時代後期（1800年前後か）に描かれたとされる「秋田街道絵巻」では、日吉八幡神社から南に「寿量院・神明堂・御内宮・松寿院・毘沙門堂」が小高い丘の上に並んでいる。

これらの絵図・絵巻に描かれている神社や寺院は、名称や配置がそれぞれ若干異なっているものの、毘沙門（堂・天）だけは、一連の御堂の並びの南端に位置しており、これが現在の勝平神社の前身だと考えられる。

明治19年（1886）4月30日、午後11時10分頃、秋田町川反四丁目から出火した火災は、激しい東南風により延焼し、外町・寺町、さらに北は保戸野愛宕町、西は八橋村・寺内村にも広がった。この大火は俵屋火事と呼ばれ、「秋田名蹟考」には、「明治十九年、火災にかかり烏有となれり」とある。俵屋火事の焼失区域図である「市街焼亡略図」に示される類焼範囲に、日吉八幡神社の南側にある2社が含まれており、これが江戸時代の絵図・絵巻における毘沙門堂にあたりと考えられる。

勝平神社の社伝では、俵屋火事の際、保戸野北鉄砲町の秋葉神社を合祀し珍宝神社と改めるとある。同20年（1887）には現在地に遷座、同25年（1892）には勝平神社と改称されている。

以上のように、勝平神社は、東北地方に広く見られる「大同年間」「坂上田村麻呂」の創建伝承を持ち、数度の変遷を経た後に、創建の地「勝平山」の地名を社名とし現在に至っている。

ともに武の神である毘沙門天と武甕槌神、火防・火伏の神である火産霊神と秋葉大権現という関係する神々からも、神社の歴史の奥深さを伝えている。

なお、境内社の稲荷神社は、銭を鑄造した頃、伏見稲荷大社の御分霊を勧請したもので古くから銭座稲荷と称され、商売繁盛の守護神として崇敬されている。

(4) 地域とのつながり

勝平神社の氏子範囲は、保戸野鉄砲町周辺である。この地域は、「旭川の西側にある武士町」であり、代々の氏子も多い。享保15年（1730）に編纂された「六郡郡邑記」には次のようにある。

秋田郡 ○上八橋村 ～中略～					
神社					
山王権現社 久保田町産神、一周年春秋の祭日美を盡せり、祭を司るを堂人と別當云。土崎					
<u>毘沙門社 保戸野足軽の産神也と</u>					
大師堂	伊勢内宮外宮両社	天神社	菩薩堂	辯才天社	
庚申堂	十王堂	帰命寺	普門寺	寶塔寺	善龍寺

上記の保戸野足軽とは、嘉永2年（1849）に幕府へ提出された「御城下絵図」（図1）で現在の保戸野鉄砲町付近で茶色（足軽町）に色塗りされた部分と推察される。現在の勝平神社の氏子区域（図2）とおおよそ同じである。

地口絵灯ろう祭りは、5月12・13日に行われる祭りである。その時代時代の様相・政治・経済・文化・教育などを庶民の心情で風刺した地口を絵灯ろうに表現したもので、神社の境内はもとより各家々にも掲げられる。近年は、地口絵制作の講習会も開かれ、子どもの手によるものも多くなってきている。

この祭りに代表されるように、勝平神社は地域と密接なつながりを持っており、地域住民の厚い崇敬を集めている。

なお、勝平神社の年間行事は、以下のとおりである。

実施日	行事名
1月13日	新年祭
5月12日	宵宮祭
5月13日	例大祭
5月12・13日	地口絵灯ろう祭り
7月30日	夏越大祓
11月13日	秋祭
12月31日	年越祭 師走大祓

5 地口行灯について

地口とは、「その時代、時代の町の生活の様相や、政治、経済、文化、教育等を庶民の心情で風刺したもの」「古い言葉、ことわざ、詩などを同じ調子でもじ

り、別の意味に置き換え、言掛のおかし味を生命とする洒落のことで現代風に言えばパロディ」「言葉遊び」である。

秋田音頭では、本来の決まった歌詞のほかに、その時々ので出来事やうわさ話などを取り入れた即興の替え歌を歌うことがあり、これを地口と呼ぶ。

また、国指定重要無形民俗文化財「土崎神明社祭の曳山行事」の曳山の裏側、囃子櫓の上に人形とともに飾られる川柳風の見返しも地口の一つであり、祭りや芸能で広く行われているものである。

地口行灯（絵灯ろう）は、享保年間（1716～1736）のころ江戸ではじまったとされ、当初は地口のみ書かれ絵は付けられていなかったが、宝暦元年（1751）ころになると、鳥や魚の絵だけの簡単なものだが地口に合わせた絵も描かれるようになったとされる。

当初、江戸においては稲荷神社の2月の初午祭りで飾られることが多かったが寛政元年（1789）ころには、地口行灯として流行し、他の神社の祭礼でも飾られるようになった。

6 秋田市域における地口行灯

藩政期の秋田市域における地口行灯に関する文献資料としては、文化元年（1804）頃と考えられる人見蕉雨の「秋田紀麗」がある。

六月

十一日

今宵金沙東清寺権現の祭禮夜宮。むかしは烟花戯（はなび）おびただし、今は禁ぜらる。されども前川十二燈を流し、家々燈籠を掛る。謎語滑稽尤も多し。「托鉢三千町。」「鰯魚満前川。」「休哲休節坊兄弟。」など此頃の戯也。

十三日

龜之町恵比壽堂祭禮夜宮、熱鬧金沙に同じ。

十五日

矢橋伊勢堂祭禮夜宮、前の兩社に同じ。

金沙東清寺は、明治の廃仏毀釈により廃寺となったが金砂神社の別当である。金砂神社は、宝永7年（1710）に寺町から保戸野に移され、同じ社地の北に金砂神社、南に東清寺が並んで配置されていた。

この祭礼では、「謎語滑稽」を書いた燈籠を家々に掛けていとあり、地口行灯が行われていたと考えられる。

龜之丁の恵比壽堂、矢（八）橋の伊勢堂の祭礼でも同様とある。なお、八橋の伊勢堂は、「秋田紀麗」とほぼ同時期に描かれたと考えられる「秋田街道絵巻」では、「神明堂」として、勝平神社の前身である毘沙門堂の北隣に描かれている。

「秋田紀麗」の記述から19世紀初頭には、久保田城下の祭礼で地口行灯が広く行われていたことがわかる。

また、「秋田紀麗」の七月の眠り流し、現在の竿燈に関して興味深い記述がある。

七月

六日

此夜を邦人睡流しとて、黄昏より稚女等に濃淡の紅衣を著せ、かうくわんをかざらせ、各竿頭に小燈一兩點又は三四點を撃げ、一隊一隊に隊をなし粉粧を衒ふ。見るに錦繡ならざるなし。鹿燈、犬燈、走馬、乞巧、猜燈、謎燈、酒落、組立、風流盡さざるなし。就中三十六街より別に大なる灯籠二十、三十乃至四五十に至るほど大竿に撃げ、力士をして持しめ（後略）

三十六の町から、燈籠がささげられた大きな竿を力士が持つ、現在の竿燈の原型のような記述がある一方で、現在の竿燈では見られない、鹿燈、犬燈、走馬、乞巧、猜燈、謎燈などの燈籠の記述がある。どのようなものであったか、詳細は明らかではないが、謎、酒落などの言葉が地口行灯的なものを想起させる。

明治16年から36年頃(1883～1903)に執筆されたと考えられる「羽陰温故誌」には、八橋の日吉八幡神社に関する記述がある。

此夜ハ俗ニ夜宮祭トテ殊ニ賑ハシク、市中毎戸ニ灯籠ヲ点シ、八橋繩手道ヨリ本社境内迄ハ数千ノ地口灯籠ヲ建テ連フテ諸所ニ人形飾物插花等アリテ（後略）

毎年、四月の中の申の日に行われる日吉（山王）神社の祭礼の夜営であり、神社境内から八橋の繩手道に続く、数千の地口燈籠が飾られている様子が記述されている。

また、現在、地口絵灯ろうを制作している神尾忠雄氏が、以前実見、聴き取りしたものを以下に記す。

- ・ 檜山愛宕神社

大正10～12年、境田素洞が、祭礼に伴い100枚ほどの地口絵を描いており戦後もないころまで地口行灯が行われていた。

- ・ 當福寺境内福千代稻荷大明神

昭和10年まで、祭礼の際に参道の両脇に60個ほどの地口絵灯ろうが飾られていた。

※往時の地口絵灯ろうが過去に當福寺に保存されていたことを神尾氏から聞

き、本市で當福寺へ聴き取り等の調査を行った。その結果、「稻荷社の祭礼が春と秋にあり、その際参道に飾られていた。藩政期から行われていたと思われるが、前記の俵屋火事で全焼し、資料も全て失われた。太平洋戦争前くらいに行われなくなった。」ことを確認した。なお、当時の小林徳治、寛次郎親子が描いた地口絵灯ろうが14個現存していた。

- ・妙覚寺

地蔵祭りの際に200個ほど万灯を飾り、その内多くは絵のみだが、1974年には数個のみ川柳を書いたものがあった。

- ・日吉神社（新屋）

1960年頃、祭礼の際に東北パルプ社宅前の電柱に地口絵灯ろうが飾られていた。

秋田市史における調査研究としては、前述の日吉神社に加え、旭川田中、外旭川水口に関する記述がある。

- ・日吉神社（新屋）

七夕の際、新屋の各町内毎に櫓を設け盆灯籠や地口灯籠を吊し、6日晩には子ども達は笹竹に灯籠をつるし日吉神社へ参詣し、その後町内を練り歩く。

- ・旭川田中（手形田中）

ねぶり流し（七夕）で蓬やガツギなどで屋台を葺いて、地口灯ろうを飾って山車を造る。練り歩く子ども達は笹に地口灯ろうを飾り担いで回り、最後に川に流す。

- ・外旭川水口

竿に横棒を三本ぐらい段にしてつなぎ、これに地口の灯籠をたくさん下げたものをかざして集落を練り歩いた。戦前まで行われていた模様。

これらの文献資料、伝聞などから、秋田市域においては、地口行灯が様々な形で行われていたことがわかるが、いずれも現在は行われていない。

7 勝平神社の地口絵灯ろう祭りの歴史

勝平神社の地口絵灯ろう祭りは、古老の言い伝えによると18世紀半ばくらいから行われたとされ、江戸で飾られるようになってからまもなく、秋田にも伝わったとされるが、その時期や経緯について記載された文献資料は確認できていない。

しかし、「秋田紀麗」で勝平神社の前身である毘沙門堂に隣接する八橋伊勢堂で19世紀初頭に行われていたこと、明治期の資料であるが「羽陰温故誌」で、八橋の町全体に及ぶような地口行灯が盛大に行われていたことが記されている実状を踏まえれば、八橋の毘沙門堂、現在の勝平神社で藩政期から地口絵灯ろう祭りが行われていた可能性は高いと考えられる。

明治に入り、現在地へ勝平神社が遷った後も、山中駒蔵、佐宗朝之助、小林徳治・寛次郎親子が地口絵の描き手として、地口絵灯ろう祭りは戦後間もない時期まで継続されていたが、その後描き手が不在となり行われなくなった。

- ・山中駒蔵 弘化3年(1846)生 大正11年(1922)没
- ・佐宗朝之助 明治4年(1871)生(弟)
- ・小林徳治 文久元年(1861)生(兄)
- ・小林寛次郎 明治24年(1891)生(兄の子) 昭和33年(1958)没

現在、地口絵の描き手の中心となっているのは神尾忠雄氏である。神尾氏は、幼少期に前述の描き手による地口絵灯ろうを数多く見て育ち、祭りが途絶えてから20年以上経過していた30代の時期に描き始めた。以下に神尾氏から聴き取りした内容を記す。

「昭和43年頃、地口絵灯ろう祭りが行われなくなり20年以上経過し、勝平神社の5月の例祭の時期になると昔を思い出して寂しさを感じていたことから、当時のものを思い出しながら数个制作し、自宅前に飾ったのが、勝平神社地口絵灯ろう祭りの復活の契機となった。隣近所の方からも頼まれるようになり、その後、氏子総代から祭り復活の強い意向を受けた勝平神社の金山佐登士宮司から、地口絵灯ろう祭りのための地口絵の制作を依頼された。

描き始めた当初は、地口の意味もわからずに始め、次第にことわざを題材にして描くようになり、その後時世や風刺も取り入れ、見る人が立ち止まり地口の意味や元句を考えてもらえるような地口絵を描いている。」

8 勝平神社の例祭と地口絵灯ろう祭り

現在は、勝平神社の宵宮祭および例大祭にあわせ、神社境内と参道、神社前の通りに設置し、また、事前に近隣8町内会の各家々に地口絵を配布し、それぞれが自前の灯ろうに貼り付け、玄関前等に設置している。

地口絵灯ろう祭りは、神事自体には組み込まれていないが、例祭の大事な部分として宮司および氏子総代が中心となり、毎年例祭に併せて準備・実施しており、宵宮祭の前に点灯し、例大祭後の朝に消灯している。

※例大祭神事の流れ

- お祓い(修祓の儀) → 開始の一礼 → 国歌斉唱
- 献饌の儀(進物を神棚へ) → 祝詞奏上(地口絵灯ろう祭りについても言及)
- 浦安舞奉納 → 玉串奉奠 → 撤饌の儀 → 終了の一礼

以下、神尾氏からの聴き取りおよび現地調査により令和7年度の地口絵灯ろう

祭りの状況を記述する。

(1) 地口絵制作

現在、神尾氏のほか、飯野氏、根田氏、奥山氏、渋谷氏が制作しており、また、町内の子ども会でも制作している。7年度は、子ども会も合わせ約180枚の地口絵を制作した。

以前は神尾氏ひとりでの制作が長年続いていたが、平成26年の国民文化祭でお披露目することを契機に、祭りを継続していく気運が高まり、講習会が開催されるなど制作者の育成が始まった。

神尾氏は、例年、正月明けから制作を開始し、4月末までに300枚ほど制作する。ただし、令和7年度は制作開始時期が2月下旬にずれ込んだため、制作枚数は少なくなった。

①「題材、地口を練る」

普段の生活において思いついたものを書き留めるようにしている。ただし、地口は情報が新鮮でなければならないため、地口絵制作は正月以降に行う。毎年全て新作を制作している。

②「下絵制作」

題材、地口に沿った下絵を鉛筆で描き、その後、筆で重ねる。和紙に下絵を写す際、和紙を重ねて描くため鉛筆では見えない。

③「赤波線入れ」

「瓶垂れ霞（びんだれがすみ）」という赤波線を和紙に2本描く。勝平神社の以前のものや東京のものなどには3本のものが見られるが、3本だと多すぎると感じ、神尾氏は2本でとおしている。また、横よりも縦に描いた方が描きやすく効率が良い。

④「地口絵描き」

下絵に和紙を重ね線を描いていく。次に色づけをしていくが、その際は下絵を外し、新聞紙の上で描くことで余計な水分を吸わせるようにしている。

⑤「地口の書き入れ」

最後に、赤波線の上に地口を書き入れる。

※制作時に留意している点

- ・調子が良いときは1日に7枚くらいできるときもあるが平均では2枚程度。
(現地調査時は、下絵がある段階から急いで描いて2時間かかったもの。また、通常は何枚も同時に同じ工程で行うことで効率を上げている。)
- ・地口の字のバランス、絵とのバランスも大事にしている。
- ・絵灯ろうは、光で照らされるもののため、色よりも線が大事である。
- ・紙は丈夫な面から和紙を使用しているが、大分描きづらい。
- ・この祭りで重要なのは、町内の各家々が参加することであり、地口絵は家々

分を先に制作し渡すようにしている。

- ・絵は詳細に描きすぎても良くない、ある程度簡略化されたものが地口絵ろうには良い。

(2) 灯ろう製作、設置

勝平神社氏子総代が中心となり、氏子と宮司等が集まり行う。

①勝平神社の倉庫に収納している灯ろうを取り出し、昨年貼り付けた地口絵を切り離し、神尾氏制作分は神社で保管し、それ以外は制作者へ返還する。

②地口絵部分以外の3面は、破れ等がなければ再利用し、新作を貼り付ける。

※灯ろうの絵柄は、地口絵を正面とし、裏面は佐竹家家紋が多いが、最近のものにはキャラクター（毘沙門天）のものもあり。右面は「勝平神社」、左面は「地口絵灯籠祭」と基本的に記載されている。

③雨に濡れるのを防ぐためにビニール袋で灯ろうを包む

④業者が設置した電球に合わせ、参道、境内、神社前の道路に灯ろうを設置

⑤夕方、灯ろうを点灯

※現在はろうそくは使用せず、全て電球により点灯している。

※以前は町内の範囲にしめ縄を巡らせていたが、人手不足のため最近は行っていない。現在は、宵宮祭の2～3日前に、町内の各所に周知のためののぼり旗を設置している。

(3) 各家々の地口絵灯ろう

保戸野北鉄砲町東町内会、北鉄砲町西丁町内会、表鉄砲町一区町内会、表鉄砲町二区町内会、表鉄砲町三区町内会、南鉄砲町一区町内会、山王二丁目第二町内会（南鉄砲町二区町内会）、山王二丁目第三町内会（南鉄砲町三区町内会）の8町内会に地口絵を配布し、各家々が各自で設置している。

①祭りの2～3日前に氏子総代をとおして各家々に神尾氏制作の地口絵を配布する。

②各家々において、祭りの日に合わせ、自前の灯ろうにより設置

(4) 灯ろうのサイズ（大と小あり）

大 奥行15cm×幅30cm×高さ43cm 境内、参道への設置用

小 奥行13cm×幅26cm×高さ36cm

道路への設置用（車との接触を避けるため小さめ）

(5) 令和7年度の灯ろう製作・設置工程

4月27日：地口絵を灯ろうに貼り付け

5月 9日：地口絵貼り付け（残）、灯ろうをビニール袋で養生

- 1 2 日：境内等に電線および電球を設置（業者）
地口絵灯ろうの設置
- 1 2 日夕方：地口絵灯ろう点灯、宵宮祭
- 1 3 日：例大祭
- 1 4 日：地口絵灯ろう回収

9 その他聴き取り事項

(1) 神社関係者

ア 昔の地口絵灯ろう

- ・地口絵灯ろう祭りは八橋、保戸野と神社の移り変わりに合わせて開催場所も変遷してきた。
- ・勝平神社以外でも、昔は各地の神社や各家々でも灯ろうを飾る習慣があり、口に出して言えないようなことを地口絵に描いた。元々は各家々自身で描いていた。

(2) 氏子総代

ア 昔の地口絵灯ろう

- ・ほかの神社で地口絵灯ろうを見たことはないが、昔、外町では各家々で灯ろうを飾っていた。また、子ども達は灯ろうを持って町内を回っていた。

イ 今後の祭りについて

- ・地口絵制作者の高齢化が進んでいることが課題である。秋田公立美術大学や保戸野小学校との協力や、コンクール展などにより全市から募集するなどを検討している。
- ・コロナ禍前は、子ども会で月1回集まり、神尾氏の指導のもと地口絵の制作を実施していたが、コロナ禍後は集まるのが難しく、各家で子ども達がそれぞれ見本を見ながら制作している。

(3) 地口絵制作者

- ・国民文化祭以降、10年くらい前から制作している。
- ・元々絵を描くのが好きだった。
- ・以前の地口絵を参考に、随時ネタを考えている。

- ・4、5年くらい前から制作している。
- ・雨に強いアクリル絵の具を使用している。

- ・国民文化祭の頃から制作している。
- ・当時、講習会があり、そこで基本を学び、あとはほかを参考にして描いてい

る。

- ・ 日常の出来事で句を作り、それに合わせた絵を描いている。

全員が共通して、できる限り制作は続けていき、地口絵灯ろう祭りを継続したいと考えている。

10 まとめ

都市部を中心に発展した祭礼は、代表的な「ハレ」行事であり、山・鉾・屋台行事に象徴されるように、造形、音楽、芸能など考えうる様々な美と驚き、笑い等を通じた高揚感を生み出す文化創造の場であり、同時にそれらを支えるコミュニティを形成する絆となり、社会の発展に寄与してきた。

地口行灯は、文芸、美術が融合した娯楽性ととともに、灯ろうの照明効果とあわせ祭礼に集った人々の「祭り気分」を高める演出効果を持つものとして祭礼を盛り上げるコンテンツであったと考えられる。

秋田市域においても、かつては、多くの祭礼等で、武士町、町人町を問わず、城下町外でも行われてきた。このことは、地口行灯が祭礼をはじめとしたハレの日の「娯楽」の主たる位置を占めていたことを物語っている。

また、地口で語られる言葉は、文献資料に残りづらい当時の世相、そしてそれを住民がどのような視点で捉えていたかを知ることができる数少ない資料である。

勝平神社の地口絵灯ろう祭りは、現在、秋田市内における唯一の地口行灯である。はじまりの時期、状況などは明らかではなく、昭和40年代に一時、途絶えていたが、近隣の祭礼などの事例から、そのはじまりが19世紀初頭以前に遡る可能性が高いこと、明治期の状況がわかる資料が多く、一時断絶前の状況が一定程度、把握することができること、そして、地域と一体となって継承され、近年、後継者の育成、保持団体の組織強化が進んでいることなどが、このたびの調査で確認された。

祭りなどの無形民俗文化財については、文化財単体としての価値にとどまらず、地域コミュニティの要であるとともに、文献資料等に残されにくい、かつての住民の生活文化や生活空間を解明、復元する貴重な資料であることが、文化財の保存においても重要な視点であると考えられる。

本市において唯一の地口行灯である勝平神社の地口絵灯ろう祭りは、文書や秋田風俗絵巻などの絵画資料等とともに、藩政期の城下町の都市空間と祭礼の状況を解明する貴重な文化財である。

今後は更に、藩政期の状況を中心に関係資料や情報の収集、既往の地口の残存状況などの調査に加え、祭礼をはじめとした「ハレの民俗研究」の重要な資料とする視点が必要である。

【引用・参考文献】

- 歴史図書社1971「六郡祭事紀」『新秋田叢書（3）』
歴史図書社1971「六郡郡邑記」「秋田紀麗」『新秋田叢書（4）』
佐々木善三郎1972「勝平神社と庶民の風刺 地口灯籠のおかしさ」『秋田さきがけ』
新秋田叢書編集委員会1977「羽陰温故誌」『第3期新秋田叢書（3）』
神尾忠雄1982「地口絵灯籠祭り 秋田市鉄砲町勝平神社祭礼」『北方風土Vol.5』
秋田県神社庁編1991『秋田県神社名鑑』
秋田市史民俗部会1995『秋田市史民俗調査報告書（一）』
秋田県教育委員会1997『秋田県の祭り・行事－秋田県祭り・行事調査報告書』
秋田市史民俗部会1998『秋田市史民俗調査報告書（三）』
伊藤晴雨著、宮尾與男編注2001『江戸と東京 風俗野史』
足立区立郷土博物館2005『特別展図録 地口行灯の世界』
秋田魁新報2022「秋田市保戸野・勝平神社の伝統行事」2022年5月11日付
秋田市2022『勝平神社の石造狛犬調査報告書』

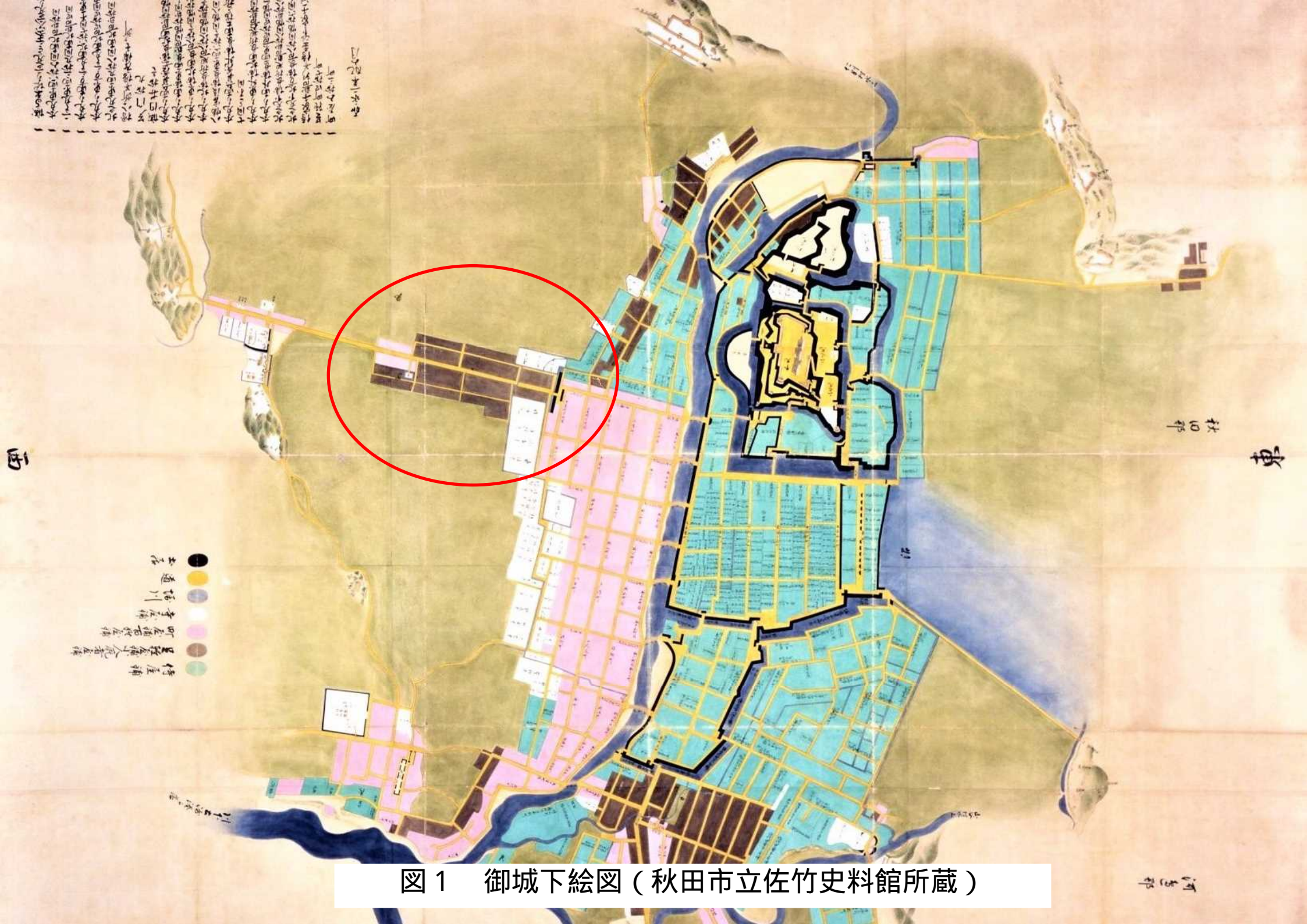


図1 御城下絵図（秋田市立佐竹史料館所蔵）

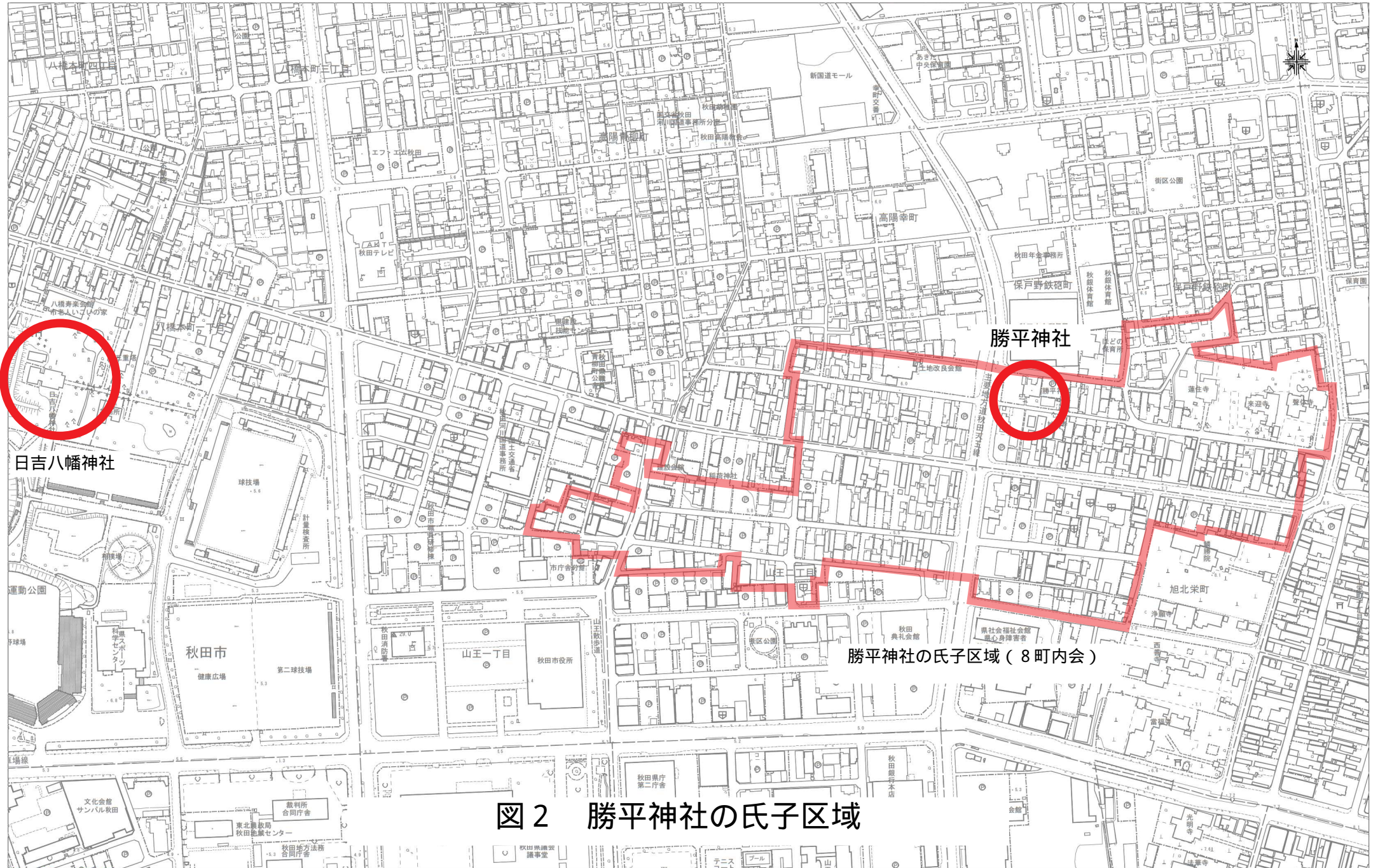


図2 勝平神社の氏子区域

令和7年度 勝平神社地口絵灯ろう 一覧

	地口
1	かなかなと その日暮らしの 十日間
2	風車 ではない危険 死が答え
3	大望 女兒誕生し 谷を越え
4	だまっても 弥生三月 冬を追う
5	長湯好き うるけ過ぎては 眠りだす
6	手を抜けば ぴたりと当てる 夫の舌
7	白波を 立てたハタハタ 過去の夢
8	一雨ごとに 傘顔を出し
9	厳しさや 夜風染み入る 秋の暮れ
10	行きたいが 餌場荒らしに 人襲う
11	愛犬も 年に一度は 衣替え
12	じいじいと 呼んだ思い出 懐かしい
13	ネギねぶか 根深いほど 上物だ
14	期待背に 角番脱し ことに良し
15	針より痛い 魚の背びれ
16	餅肌 に いぼが出来て 豆大福
17	届かぬところ なお痒さ増し
18	寒中見舞い もらって安堵
19	物価高 うなぎ登りに 音を上げる
20	気になるは 人の病より 我が病
21	松茸は 口に入らず 目に入り
22	耳鳴りは 雷よりも たち悪し
23	文を書く スマホで言えぬ事もある
24	県市政 若さ支える カゴぶ
25	酒造界 米をけずって 鎬を削る
26	首を曲げ 頭をひねり 匂を捻る
27	雨よけに 牡丹に傘は 風情あり
28	ネタリアル ハマス全滅 プーチン欲
29	愛犬は 子より甘えは 上手なり
30	巳年生まれも 蛇には弱い
31	きれいに咲いて 末は梅干し
32	清流や 河童飛び込む 水之音
33	見えぬ鶯 声で満足
34	トランプと 会う先見の目 アソウか
35	トランプよ 世界苦しめ いカンゼイ
36	目薬は 上を向いては 口をあけ
37	メニュー決め 肴は鮭で 飲むお酒
38	水垢離に 心身清め 機会出来
39	詐欺多発 金持ち多い 貧乏県
40	花の香りにつける鼻先
41	ボタン付け しばらくぶりの 針仕事
42	ねこも人肌 恋しくもなり
43	見事なる 湖面に映える 逆さ富士
44	草地歩けば 糞はそのまま
45	あの貴女(ひと)の 素顔見るのは旦那さん
46	原唸る 阿部は名将 舌を巻く
47	干支で嫌われ 猫は好かれる
48	白菜は 重要蔬菜のトップなり
49	お祝いは 紅白似合う 付きものだ
50	実るほど 値段の上がる 稲穂かな

51	名月や わら焼きもなく 笑顔なり
52	寂しさとともに 象の足裏
53	月の砂漠を楽々と
54	チャックをしても漏れる口先
55	くしゃみ鼻水 コロナを意識
56	齶田 浦なる 神この社
57	商品券 意志の強さも 砕けたり
58	オットあぶない 女に注意
59	セクハラよ 見て楽しめる 社風なれ
60	健康を 願って今日も ウン試し
61	和食なら 出汁を頼るは 海の幸
62	半ズボン チクリ血を吸う エッチな蚊
63	人心 曇り後雨 晴となる
64	サクラマス 数えられない 竿を振る
65	飲み訓れりゃ 安い旨さのパック酒
66	米価倍 農家裕福 恵比寿顔
67	フナドジョウ うまいナマズは 見当たらず
68	インフルに 鳥肌が立つ 飼育する
69	物価高 タンス預金も底をつき
70	買いやすい 鱈は味よし 秋田産
71	ビリビリと 値上げ伝わる 電気料
72	猫は素直に 眠り留守番
73	能登半島 手本になった 明日我が身
74	頑固者 肩ひじ張るな 意地はるな
75	顔よりも 線に目がいく 夏姿
76	浮気させぬと 妻尻に敷き
77	老けも歳 思い出話に 深けていく
78	灯油値上がり 寝坊癖つき
79	朝食に 一つ目小僧 欠かせない
80	選挙戦 票は食ったり食われたり
81	遊歩道 蓮の花咲く 棧敷席
82	核兵器 無き世を願い 平和賞(ノーベル賞)
83	パリ五輪 そぼ降る闇を 聖火行く
84	冬眠を 忘れたクマが 家探し
85	また言った "貧乏くさい" 腹話術
86	日銀が ピエロに似せて 金融策
87	高齢者 ブレーキアクセル 右左or左右
88	民主党 トラトラトラに 完膚なき
89	群雄が(われこそは) まるでお祭り 総裁戦
90	春宵に 枝垂花散る 角館
91	ポスターが 落書帖に 都知事選
92	ヤリー投 パリの空突き 金メダル
93	衣(きぬ)着せず 辛口で解いた 大相撲
94	兄妹 違う形の パリ五輪
95	年?とれば 昔マージャン 今(e)ゲーム
96	きな臭い 匂いぶんぶん 台と中
97	(藤井)八冠は 一冠減っても 大ニュース
98	タクト一本 世界の小澤 振り続け
99	自民党 政治とカネの うらみ節
100	地震予知 巡り巡って 米不足
101	耳にタコ 飽きるほど見た50/50
102	パリの街 笑顔爽やか 走り切り

103	パワハラも おねだりもなしと 再当選
104	ねこババを 何と通訳 大谷に
105	沈滞に 希望を灯せ 若き人
106	耳栓し 詐欺のささやき 馬耳東風
107	秋田から 世界を見せた ペアが去り
108	公約は 手のひら返しに 言い換えて
109	対局戦 どこで打つかで 町起こし
110	”ハラハラ”し 大鵬孫を 応援す
111	小池(都知事)三選 一極集中 なお止まず
112	新聞を 開けて毎日 クマと詐欺
113	バドミントン シダマツに続け 秋田っ子
114	弾薬を 貸し借りして 仲良しに
115	脱炭素 洋上に林立 風車
116	鳥だって 巣立つ日がくる 孫発ちぬ
117	賃上げも 差し引きマイナス 物価高
118	与野党が 朝令暮改の 数合わせ
119	富士の山 北斎もビックリ 新百景
120	こころ旅 津々浦々に トーチャコし
121	予算(カネ)2倍 地方創生 中身・後
122	能登の地に またいつか見ん あの茜
123	サッカー場 あっち向いてこっち向いて 元の鞘
124	釣りバカを ひたすら生きて ハマちゃん逝く
125	猪・熊を 減らして知事の 花道に
126	石破さん アメリカは今 ”べらぼう”ぞ
127	関税を 弄ぶとは トラ黙れ
128	刷新を あなたに託して 投票へ
129	がんばったヨ 泣くなその人 負けもある
130	大曲(あきた)から カナダに咲いた 夜の華
131	時間給 秋田はいつも 最後っぺ
132	衆院選 怨みつらみの 非公認
133	知事替わる 市長替わる 秋田変わる
134	カレンダー 予定無しで 腹が立つ
135	この年で 予定なしって 当たり前
136	冬空で つばさ広げる 渡り鳥
137	孫ふえて お年玉にも 限度あり
138	春頼り 友も旅だち 寂しげに
139	目が覚めて ガンバルぞっと カツ入れる
140	草花も 季節判らず 雲隠れ
141	朝起きて さてさて何をと 考慮中
142	食材も 高値続きで 買い控え
143	街中に 小学生の 姿見ず
144	薬漬けチェック
145	キラキラネーム 親と子の顔が見たい
146	もしもピアノが弾けたなら
147	秋田の海 ぬれくて来らえね!
148	給食費より 家と車のローン先!
149	青空に 桜満開 心晴れ
150	都会グマ 山に住めない 里の味
151	西瓜割り 危ない頭 すぐ逃げる
152	夏は水 渴く前にも もう一杯
153	備蓄米 どこへ行ったか 米価高

江戸イロハかるた・元句と神尾氏のパロディー句

国民文化祭・2014勝平神社「地口絵とうろう祭」実行委員会

	中京から諸国に伝わった句	元句	神尾氏のパロディー句
イ	一を聞いて+を知る	犬も歩けば棒にあたる	犬も放せば法に触れる
ロ	六十の三つ子	論より証拠	ローンより辛抱
ハ	花より団子	花より団子	花より暖房
ニ	憎まれっ子神直し	憎まれっ子世にはばかる	憎まれっ子世に三代
ホ	惚れたが因が	骨折り損のくたびれ儲け	コネ売り損のくたびれ儲け
ヘ	下手の長談義	尻をひって尻つぼめる	陽が照って傘すぼめる
ト	遠い一家より近い隣	年寄りの冷水	年寄りの世話好き
チ	地獄の沙汰も金次第	塵も積もれば山となる	尻も窄めば老いとなる
リ	輪言汗の如し	律儀者の子沢山	タラ ニシンの子沢山
ヌ	盗人の昼寝	盗人の昼寝	盗んではふて寝
ル	類をもって集まる	瑠璃も玻璃も照らせば光る	留守も居るも鍵かけ安堵
オ	鬼の女房に鬼神	老いては子に従う	肥えては医に従う
ワ	若い時は二度ない	破鍋に綴蓋	我何故にどじだろ
カ	陰裏の豆もはじけ時	癩の瘡恨み	買い腐れ捨てうらみ
ヨ	よこ鋤で庭掃く	葎の茎から天井覗く	良し悪しすっかり政治見詰める
タ	大食上戸餅食らい	旅は道づれ世は情け	旅は靴ずれ世は辛い
レ	連木で腹を切る	良薬口に苦し	量薬 国に悪し
ソ	袖振りあうも他生の縁	総領の碁六	僧侶の人徳
ツ	爪に火をともす	月夜に釜を抜く	昼間に詐欺働く
ネ	寝耳に水	念には念をいれ	瓶には酒を入れ
ナ	習わぬ経は読めぬ	泣き面に蜂がさす	成物に蜂がつく
ラ	楽しんで楽しらず	楽あれば苦あり	楽あらば譜あり
ム	無芸大食	無理が通れば道理ひっこむ	無理に通れば道路引っ込む
ウ	午を馬にする	嘘から出たまこと	尻から出たまこと
イ	炒豆に花が咲く	芋の煮えたも御存知なく	色が付いても知らず悔やむ
ノ	野良の節句働き	のど元すぎれば熱さを忘る	喉元ゆるめば暑さ忘れる
オ	陰陽師身の上知らず	鬼に金棒	檻に金網
ク	果報は寝て待て	臭いものには蓋	くどい者には蓋
ヤ	闇に鉄砲	安物買いの銭失い	安物買い高いガソリン
マ	待てば甘露の日和あり	負けるが勝	まけるは得
ケ	下戸の立てた蔵はない	芸は身を助くる	計は家を助くる
フ	武士は食わねど高楊枝	文は書きたし書く手は持たず	文は携帯書く手で押そう
コ	志は松の葉	子は三界の首伽	子は何度も金無心
エ	閻魔の色事	えてに帆をあぐ	得手に歩と成り
テ	天道人殺さず	亭主の好きな赤鳥帽子	亭主の好きな赤提灯
ア	阿呆につける薬はない	頭かくして尻かくさず	辺り構わず尻からブー
サ	さわらぬ神にたたりなし	三べん回ってタバコにしよう	三杯食べて体力つけよう
キ	義理と禅	聞いて極楽みて地獄	効いて極楽見て負けた
ユ	油断大敵	油断大敵	肥満大敵
メ	目の上の瘤	目の上の瘤	芽の上には巢
ミ	身うりが古み	身から出た錆	身守るは先
シ	尻食え観音	知らぬが仏	切らぬも情け
エ	椽のしたの力持ち	椽は異なもの味なもの	円は利なもの困りもの
ヒ	貧祖な重ね食	貧乏暇なし	辛抱敵なし
モ	桃栗三年柿八年	門前の小僧習わぬ経を読む	門前の子供習わぬ漁を知る
セ	背戸の馬も相口	背に腹はかえられぬ	銭腹にかえられぬ
ス	量に染まれば黒くなる	粋は身を食う	ついに身を捨て
京	ナシ	京の夢、大阪の夢	今日の夢・夫酒の夢

當福寺地口絵灯ろう現存一覧

番号	地口	元句力	絵
1	勘定の鶴	丹頂の鶴	鶴とソロバン
2	親まさりの酒の児	親まさりの筍	子どもと徳利
3	活動にふ限(き)り	活動に封切り	男性と将棋盤
4	めぐりあれとも結ばれぬ		女性とすり鉢・すりこ木
5	額あれば句あり	楽アレハ苦アリ	男性と額
6	浮きたえぬる波だなりけり	道印法師	波と釣竿と浮き
7	鯉のいろはを袂から	恋のいろはを袂から	鯉の擬人と袂からいろは
8	村コよいとこたゝけサノドーン	港ヨイトコ佐竹サンの御門	大太鼓と踊り手
9	天神左満(さま)に爛かけて	天神さまに願カケテ	侍と熱燗
10	??(破れている)ゼロJ組合	納税組合	0(数字)とJ
11	細工師に當選	代議士に當選	大工と木材
12	馬仙山は砂新手黒の主要人物		手が黒い中国人と砂山
13	立剣面錢湯 (裏面)風雨以時	立憲民政党	破れが大きく不明
14	萬じゅう權益の擁護	萬州權益の擁護	まんじゅうの絵と値札(1ヶ十錢よりまけぬ)

當福寺地口絵灯ろう（現存）

